

研究ノート

アイシンギョロ *aisin giro*

— 愛新覺羅と愛親覺羅 —

石橋 秀雄

最近、清王室の姓である *aisin giro* アイシンギョロ 愛新覺羅 (日本では、アイシンカクラともいう) の名は、映画「ラストエンペラー」の影響もあってか一般に広く知られるようになった観がある。また、これと機を一にするかのように、愛新覺羅溥儀をはじめとする愛新覺羅家にかかわる出版物もみられている。

本稿は、このアイシンギョロについて、特にその漢字表記の問題について、いささかとりあげてみようとするものであるが、その骨子は、一九八九年一月二〇日、立教大学でおこなった「マンジュ *manju* とアイシン *aisin*」と題する最終講義にある。ただ、当日は、筆者の時間配分のまじさから、アイシンについては、その一部に言及するにとどまった。今回たまたま寄稿する機会をえたので、補足の意味を含め、許された紙数の枠内において記してみたい。

表題に関わる問題については、近時「愛新覺羅考」(『東方学』第八〇輯、一九九〇年七月)と題するすぐれた論考を発表されている神田信夫氏によって、三〇余年前に既にとりあげられているのである。八東洋史五〇年のあやまり「愛新覺羅」の歴史Vという見出しをもって一九五九年に記された一文がそれで、氏はその中において大略次のようなことを記しておられる。

天城山心中事件で「愛新覺羅」という名が一躍有名になっただけでも、事件を報道した諸新聞の中で「愛新覺羅」と記していたのは読売新聞だけで、他はみな「愛親覺羅」となっていたこと。

「アイシンカクラ」とか「アイシンギョロ」とかいつている「愛新(親)覺羅」は、中国語とまったく系統のちがう満州語の発音を漢字で表わしたもので、漢字の意味と無

関係であり、満州語の「アイシン」は金のこと、尊貴の意味をあらわしていること。

日本語では「愛新」でも「愛親」でも同じ「アイシン」であるが、中国音では新は「シン」、親は「チン」でちがってくる。したがって「愛親」は「アイチン」となって意味をなさないこと。

清朝の漢文文献では、初出の『武皇帝實録』（一六三六年編）以来、つねに「愛新・覺羅」であるが、いかなるわけか、日本では「愛親・覺羅」と誤って通用していること。

日本でいつからそうなったか明確でないが、試みに明治三〇年代に発行された中学校用の東洋史の教科書を見ると、そのほとんどが「愛親・覺羅」となっている。しかし、那珂通世博士の『那珂東洋小史』や『那珂東洋略史』は正しく「愛新・覺羅」と記していること。

明治三〇年代といえは、東洋史という学科が中学校にはじめておかれたばかりで、それ以来半世紀にわたって東洋史が教授されてきた間に、「愛親・覺羅」の文字が幾十百万ともしれぬ中学生の脳裏に刻みこまれたであろうこと。

覺羅については、明確ではないが、満州人の姓の中でも著名なものといわれており、覺羅とつく姓はいくつかあるが、愛新覺羅というのは清朝皇室以外は使っていないこと。大略以上のような神田氏の指摘から、満州語でアイシン

史苑（第五二卷二号）

ギョロ aisin borjo と呼ぶ清王室の姓を漢字で表記する場合、愛新覺羅と記するのが一般的であるのに、日本では愛親覺羅と記されることが多い事実を知りえよう。またこの誤った表記は、日本語の発音では、新も親もともに「シン」であり、かつ中学校用の東洋史の教科書の多くが親と記していたことなどによると氏はいわれるのである。したがって本稿でとりあげる表題の解答は、すでに三〇余年前の一九五九年に神田氏によって明快になされているといえる。しかも、その時期は、一九五七年二月一日におこった天城山心中事件からほど遠くはないのである。しかし、誤用はその後も続き、今なお諸書に散見される。二〇三の例をあげてみよう。

一

一九八九年二月に出版され、一九九一年二月に九刷をみている『紫禁城の黄昏』（文庫本）一三五頁には、著者 R・F・ジョンストン自筆の「愛心覺羅」という四文字の図版があるが、同頁にみえる本文訳には、次のような一節がある。

ついでながら、満州皇族の姓にあたるものはアイシンギョロである。これは中国の歴史において満州皇帝の一族の興隆を描写する場合を除いては、めったに耳にすることも文字で読むこともない。漢字では「愛心

覺羅」〔または愛親覺羅〕と書き、北京官話では「アイシンチアオロ」と発音する。

引用文中の「」内は、同書の訳者が付記したものであるが、まさにそれは新ではなく、親である。著者が記す愛心の心は新と同音であり、こうした表記はみられるが、新と親は神田氏が指摘しておられるように日本語では同音でも中国音では異なる。誤植であることを望みたいが、九刷を重ねていることは、気になるところである。ちなみに『広辞苑』をみたところ、初版では、愛親・覺羅であった(三版では愛新となつてゐる)。また『近代日本総合年表』(一九六八年一月二五日発行)の一九五七(昭和三二)年一月二〇日(四一八頁)にも、前述の天城山心中事件について

伊豆天城山で、元満州国皇帝の姪愛親覺羅慧生と級友の心中死体発見

とみえ、愛親とある。巻末の索引も愛親覺羅慧生である。

いかに愛親と誤記するものが多いかを示しているようである。これが誤植であるとすれば、いかに誤植が多く、それが校正者の注意をひくものではなかったことを示しているといえよう。以上は近時の例であるが、こうした例は神田氏の指摘されるように明治以来の書にみられる。

版權免許が明治一〇年九月二五日とあつて一八七七年につくられ、翌年発行されたと考えられる石村貞一編次『明治新元明清史略』全五巻中の巻之三、明下神宗萬曆十一年五月の条には、

〇十一年五月、努兒哈赤克圖倫城、努兒哈赤姓愛新覺羅、東韃靼女直部之人也。

とみえ、本文は愛新とある。しかし、その上段の説明には愛親覺羅氏始起兵

とあり、新は親にかわつてゐる。まさに同一書内における両者混用であり、すでに明治初期からそれがみられるのである。

神田氏が例としてとりあげられている那珂通世博士の著書のなかの『那珂東洋略史』(大日本圖書株式會社刊、明治三六年一月発行、三七年三月再販)をみると、その第四篇近世、第一章清の開國、世祖の一統(一五七夏)の項には、

：建州女直は、又滿洲長白山の二種に分れ、滿洲のアイシンギョロは、赫圖阿拉興京の地に居り：

と記されており、正しく愛新覺羅とある。なお、この書も教科書の役割をなしたようである。明治三七年三月二四日、文部省検定済、中学校及師範学校歴史教科書と記されている。対比する意味で桑原隲藏博士著『増補東洋史教授資料』

(東京開成館、大正三年五月発行、大正一二年八月増補再版発行)をみると、二二五、努爾哈赤以前に於ける満洲族の沿革(三九〇頁)には、

愛親覺羅部の起源は、清朝の『太祖實録』に據れば、長白山中の布爾瑚里湖に浴せし天女佛固倫が、鵠の將來せし赤果を含みて生みし愛親覺羅(姓)布庫里雍順(名)を以て開國の祖となす。

とあり、その他の個所に記すのもすべて愛親である。

次に教科書関係以外の例をあげてみよう。稲葉岩吉(君山)博士の『近代支那史』(大阪屋號書店、大正九年六月発行)をみると、第一編満洲民族の勃興、第二節清朝の創業、イ、太祖の復讐戦、清祖世系の由来(二二頁)の条には、

…福満その人が、果して脱羅の後たるやは、多少の疑ひなからず、正しくいへば、清の太祖、は叫場の孫、塔失の子と稱するを以て歴史的價值を有すとすべし、姓を愛新覺羅(即ち金覺羅)といへるは、後人の假作にや、その始めより斯く稱呼せしかは、明かならず、太祖奴兒哈赤は實に、西紀千五百五十年(嘉靖三八)を以て、その呱呱の聲を揚げしなり。

とみえ、愛新覺羅と記している。博士は『支那近世史講話』(日本評論社、昭和一三年二月発行、昭和一六年八月五版)

史苑(第五二卷二号)

では、アイシンギョロ氏とカナ表記を用い、『滿洲國史通論』(昭和一五年四月発行、昭和一八年八月第三刷)ではアイシンギョロ(愛新覺羅)氏と記すなどその記し方は一様ではないが、漢字表記はいずれも愛新である。⁽⁴⁾

以上の数例から判明するようにアイシンギョロの日本における漢字表記では、アイシンに愛新と愛親があり、日本読みでは、いずれもアイシンである。しかも新と親とは字型が類似しているので誤用や誤植もおこりやすいといえる。また校正に際して誤りに気付きにくいことも否定できまい。明治以来一〇〇年以上にわたって続いてきた事情もわからないではない。しかし、その間に誤りに気付きうる機会はしばしばあったはずであり、天城山心中事件も一つの機会であったといえよう。だがその誤りについて指摘されたものは、前述の神田氏の一文以外、筆者は寡聞にして知らない。いずれにせよ、日本における新と親との混用は単なる誤りであるのかいさか疑問があるので検討してみたい。

一

まず日本における代表的な満洲語に関する辞典の一つにあげられている『満和辭典』(昭和一二年二月発行)の *aisin* の項をみると、意外にも、そこには(一一頁)

aisin gioro 愛親覺羅(清朝の姓)〔彙、本朝國姓〕

と記されており、愛親覺羅なのである。しかも清朝の姓と

付記されている。文中の彙とは『清文彙書』のことであるが、同書には引用文の如く「本朝國姓」と記すのみである。次に『對譯滿洲實録』(日滿文化協會、昭和十三年二月一日発行)をみると次のようである。まず巻末の人名地名索引一、滿洲名索引をみると

aisin gioro 愛親覺羅 I、五、二五、III、一一二とあり、漢名索引には

愛親覺羅 *aisin gioro*

とあっていずれも愛親である。そこで索引の I、五に当る巻一の五頁をみると滿洲文の対訳部分には

吾が *ei gi* 姓 *sei* 天 *ten* より *yo* 降せる *kyo* 愛親 *ai sin* 覺羅 *ko ro*

と記されおり、下段に滿文と対応した形で記す漢文の『滿洲實録』には、

…姓愛新 漢語。覺羅 也 姓。…

とみえる。したがって日本語訳は愛親・漢字の原文は愛新ということになる。索引 I、二五にあたる巻一の二五頁では、対訳に

「甚たしき *shinshi* 人 *jin* を *yo* 仰ぎ見て *yo* 生 *shin* ぎん *gin*」
寧ろ *ning ro* 愛親 *ai sin* 覺羅 *ko ro* 姓の人 *sei jin* 生 *shin* ぎん *gin*
寧ろ古塔の *ning ro ko ta no* 貝勒共 *bei ro ko* を *yo* 仰ぎ見て *yo* 生 *shin* ぎん *gin*「

とあり、漢文には

與其仰望此等人。不如投愛新覺羅六王孫。
とある。また III、一一二にあたる巻三の一、二頁にも対訳では、

天 *ten* より *yo* 降りたる *kyo* 愛親 *ai sin* 覺羅 *ko ro* 姓の *sei jin* 人 *jin* に *yo*

とあり、漢文には 天生愛新覺羅人

とある。いずれも日本語訳は愛親であり、漢文は愛新である。したがって、この場合における日本語訳の愛親は単なる誤解とか誤植とはいいい難いものがある。しかも両書の発行の時期は滿洲帝国の存在した一九三七〜八(昭和一二〜一三)年である。そこで同じ頃に刊行された『東洋歴史大辭典』(昭和一二〜一四年発行、昭和六一年縮刷復刻版発行)の記述をみてみる。

『東洋歴史大辭典』では項目の表記からしてアイシンギョロではなくアイチンギョロ愛親覺羅である(巻一、七頁)。またそこには、

清朝の王姓。アイチンは滿洲語で「金」、ギョロは「姓」を示し、「金氏」といふ意である。覺羅は滿洲族の著姓で、古い家柄であり、伊爾・舒々・西林・通顔・阿顔・呼倫・阿哈の覺羅氏があるが、ここには愛親なる覺羅氏は存しないから、愛親覺羅氏は寧ろ新

しく作られた覺羅氏であらう。…明朝並に李朝側史料によれば、清朝は創始期には佟姓又は童姓を稱し愛親覺羅とはいってをらず、恐らくかく稱したのは天命元年（一六一六）に國名を「アイチン・グルン」金國とし、努爾哈齊自ら金國汗と稱した時であつたと思はれ、アイチンに氏族の呼稱ギョロを附して愛親（新）覺羅としたに相違ない。清朝開國説話として「太祖實録」によれば、愛新覺羅氏の起源は清浄なる天女佛庫倫の子布库里雍順の時とせられ古い「太祖實録」には「吾天女佛庫倫所生也、姓愛新覺羅氏、名布库里雍順」とあり姓を自稱したが後に修訂せられた「實録」には天女たる母が命名したことになるて、「佛庫倫尋産一男、生而能言、體貌奇異、及長母告以吞朱果有身之故、因命之曰、汝以愛新覺羅爲姓、名布库里雍順」とあり、説話発達の姿がみられる。…愛親覺羅氏の世系は「實録」によれば、上表の如くであるが、…従て愛親覺羅氏の世系としては太祖より三代まで確實に溯上し得るのであり、清初以来約三百五十年、清朝十二代を経て、その世系は現に滿洲國皇室にまで連綿としてゐる。…

と記されている。長文の引用となつたが、そこには、いくつか指摘したいことがある。まず見出し項目名のアイチン

史苑（第五二卷一號）

ギョロについて、「アイチンは滿洲語で「金」と説明しているのは誤まりである。滿洲語ならば金は *ai sin* であり、カナ表記はアイシンとなつてアイチンとはならない。前述の神田氏がすでに指摘されているように、愛親の中国音であるならば *ai qin* (*ai chin*) でカナ表記はアイチンとなる。したがつて引用文中にみえる「國名を「アイチン・グルン」金國とし」とはならない。ちなみにグルン *gurun* は滿洲語で国の意であり、問題はない。また「アイチンに氏族の呼稱ギョロを附して愛親（新）覺羅としたに相違ない」として親（新）と記しているのも誤まりといわざるをえない。前述のように新はチンとはならないのである。『實録』に基く引用文には愛新と正しく記しながら、世系に関する記述などは、すべて愛親である。もはや単なる誤まりとはいえなくなる。ところで本辞典の索引をみると、そこには愛新（親）覺羅とあり、親の方が括弧つきになっている。その指摘する一七、四一四五、八一―一六のうち、一七はここに引用したアイチンギョロである。四一四五は、清の項に含まれる記述であり、八一―一六は滿洲の項に含まれる記述であるが、ともに愛親覺羅であり、愛新ではない。なお四一四五では、アイチンではなく、アイシンギョロとルビがふられている。このほかヌルハチのことを記す太祖の項（五卷、四七二頁）にも愛親覺羅とある。

いずれにせよ、索引に記す愛新(親)という記述は皆無であり、前引のような愛親(新)という記述がみられるのみである。そこで試みに清朝最後の皇帝である宣統帝溥儀についての記述をみようとしたら、宣統帝も溥儀も康德皇帝をみよと指示されており、そこには(二巻、三一頁)次のような記述がみられる。

姓は溥(Pr)、名は儀(ri)。一九〇五年御誕生。純満洲人。康德皇帝とは単に康德年間を統治し給ふ皇帝と云ふ意味に解するを至當とすべく、従て現満洲帝國皇帝に對する俗稱と看做される。帝は清朝第十二世の皇帝(宣統帝)、……

記述からうかがわれるように、宣統帝であることを記しながら、愛新覺羅溥儀とは記さず、姓は溥、名は儀となつてゐるのである。字輩(排)は無視されて溥儀は姓と名に分けられ、溥氏の誕生をみていることになる。まさに愛新覺羅氏とは別の位置づけである。しかも康德皇帝という元号による項目だてもあり、意表外の記述といわざるをえない。また、そこに純満洲人と記しているのは甚だ不可解な説明である。いずれにせよ、ここにあげた一九三〇年代後半の刊行になる諸書では愛親を基本としており、漢文史料にみえる愛新に對する日本語表記も愛親となつていて、単なる誤まりとか誤植といえるものではない。ことに専門

家の手になる辞典類が愛親であつては、一般に愛親と記すようになるのも当然といえよう。しかも、その専門家の方々が、一九四五年以後に記すものは、すべて愛新なのである。とすれば、一九四五年以前は愛親で統一を計る一部の動きがあつたと考えられよう。その時期は、日本の傀儡国家満洲帝國の建設期に當る。

一九三二年三月一日、愛新覺羅溥儀を執政とする満洲國が成立し、三四年には溥儀を皇帝とする満洲帝國となり、年号も大同から康德へと改められている。前引の康德皇帝である。皇帝となつた溥儀は、一九三五年に訪日し一九四〇年に再訪している。また同年帰国後、創建したのが天照大神を奉祀する建国神廟である。そして建国一〇周年にあたる一九四二年には、日本を親邦と称するに至つてゐるのである。そこには、清朝の再建ではない満洲帝國建設の流れがあることを伺いえよう。しかも、そこに建国されたものは、友邦日本から親邦日本への位置づけをともしなう満洲帝國であつた。

一

清王室の姓であるアイシンギョロの漢字表記愛新覺羅・愛親覺羅をめぐる日本での記述を主としてとりあげてきたが、予定の紙数も残り少くなつたので、一応のしめくりをしておきたい。

前述のように日本では明治以来、愛新と愛親の混用があり、誤解されていた事實は否定できない。その点は三〇余年前に神田氏の指摘されたとおりである。誤用は、新も親も日本音ではシンであり、かつ字型も類似しているなど諸種の事情によるものと考えられる。しかし一九三〇年代における満洲帝国の建設は、事情をかえたようである。当時の歴史関係書の多くが愛親と記すようになってきていることは、これを物語っているとえよう。もとより、辛亥革命に続く清帝退位以降、愛新覺羅家の人々のなかには、ジョンストンも記しているような金と姓を改めた人もあり、また愛心覺羅と記すような同音異字も中国書にはみられている。しかし、中国書の中では愛親と記したものはほとんどないといつてよい。

なお、日本の場合でも歴史関係書に愛親の記述は多いが、当時の漢和辞典や中国語辞典の中には、愛新覺羅と記すものが少なくない。したがって愛親に統一されたとはいえない。ただそうした人為的要素がうかがえるということを指摘しておきたい。一九四五年以後における愛新と、愛親の混用は、今なお続いていると、いつてよい。昨年訪中した際、交換した名刺の中には、愛新覺羅と記し、金と付記した名刺と日本語でアイシンカラとルビを付した名刺があったことを付記して稿を終える。(一九九一年二月記)

注(1)講談社刊行の世界史教科書『高等世界史』の内容案内に寄稿されたものである。

(2)例えば『清朝野史大観』(一九二六年刊)巻二「清宮遺聞」の満洲非地名の項には

清語謂金曰愛辛。

とあり、愛辛とするしている。なお崇奉堂子の項には、

崇奉堂子、為愛親覺羅氏特有之習慣：愛親覺羅氏所奉之

堂子：

とあり、愛親とするしたものもある。それが誤植か否かは俄に判別できない。

(3)同じ明治10年に出されている増田貢『皇朝政典掇要』には愛親覺羅とみえる。

(4)この稲葉氏や内藤虎次郎をはじめとする日本の学者の研究も紹介している謝国楨『清開國史料考』(一九三一年刊)にはすべて愛新覺羅と記されている。

(5)それはまさに徐珂編『清稗類鈔』第五冊、「姓名類」にみえる。満族位以名之字为氏。に当たるようなものといえよう。

なお『清稗類鈔』ではすべて愛新覺羅と記されており、注(2)にあげた『清朝野史大観』とは異なる。

(6)清代の記録には老満洲とか舊満洲・新満洲といった呼称がすでにある。

(7)同じ時期の書でも忠実に愛新覺羅と記しているものもある。訳に誤りは多いが、興亜院政務部譯『魏源聖武記』(昭和一八年刊)などはその例で、正しく愛新覺羅と記している。

(8)この点について『紫禁城の黄昏』(本文前引の文庫本)一三四頁には、

アイシンギョロ aisin gioro—愛新覺羅と愛親覺羅—(石橋)

「アイシン」とは満州語で「金」を意味するから、皇族の多くは中国式の姓として金という字を用いている。とみえる。

(9)前掲注(2)参照

(10)ただし、注(2)に例示したように愛親と記されたものもあるので皆無とはいえない。

(11)例えば本文中にとりあげた天城山心中事件の起った年にあたる一九五七(昭和三二)年の三月に初版の刊行をみている諸橋轍次著『大漢和辞典』巻四には(一一三頁)、正しく愛新覺羅(アイシンカクラ、アイシンギョロ)と記してあり、その説明には

もと満州族の一部の名。のち清帝室の姓、覺羅は族の意、愛新は金の意、金人の裔を表わす。〔太祖實録〕佛庫倫 尋産一男、…汝以愛新覺羅為姓・名布庫里雍順。〔清通志、氏族略、國姓〕愛新覺羅氏、我朝先世、堯祥於長白山、云云、臣等謹按、愛新覺羅氏、國語以金為愛新、覺羅乃姓也、…〔清稗類鈔〕愛新覺羅、譯言為金趙、愛新譯金、覺羅譯趙、…愛新覺羅、實為趙宋之後裔居金京者。

とある。また一九五四(昭和二九)年四月に第一刷を発行している井上翠著『井上中国語新辞典』には(四頁)、

〔愛新覺羅〕ai4 hsimi chieh2 lo2

清朝皇室の姓氏。「愛新」は金の意、「覺羅」は趙の意と記されている。古いところでは、一九三三年(昭和八)年に刊行された石山福治編著『支那語大辭典』(一九六〇年『中国語新辭典』として復刻)に(五四五頁)

〔愛新覺羅〕ai4 sin2 chio2 lo 満州ノ姓。愛新ハ満州語ノ金ニシテ覺羅ノ譯音ハ趙ノコト、北宋ノ二帝以後女真人ニ至リ之レヲ姓ト為スモノアリキとみえる。いずれも愛新であり、愛親ではない。

なお歴史書の例として一九三九(昭和一四)年に刊行された文庫本の田中華一郎著『東邦近世史』上巻の第二章、第一節をみると(四九頁)

…又曰く、我朝姓を愛親覺羅アイシンギョロ氏と曰ひ、國語に金を愛親と曰ふ。金源同派の證となすべしと。

とあり、愛新ではなく、愛親である。

〔付記〕

本稿は、冒頭で記したように一九八九年一月二〇日(金)に行つた最終講義「マンジュとアイシン」中のアイシンに関する内容の一部をまとめたものである。アイシンについては同年一月二日(土)にフェリス女学院大学での市民講座でも言及したが結果は予期したとおり賛否半ばした。若い方々からは悪評が多かったが、年配の方々には深刻に受けとめていただけたようである。いずれにしても、自省の意味をふくめ、書きとどめておきたかった問題の一つである。

(フェリス女学院大学教授)